

クラウドナイン・クライマーズ・ネット (東京)

伊藤 忠男

http://www.angkorclimbers.net

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



C孤児院の最後になったAW(人工壁)でのクライミング教室で。10歳のメラ(仮名)に肩を叩いてもらっている僕。



トンレサップ湖のバードサンクチュアリで、眼前に現れた珍鳥、ジャント・ペリカン。フィリピン・ペリカンの亜種。魚を食べてしまうので漁業から見ると害鳥らしいけれど。

立ちほだかる
“オウンリスク”の壁

孤児ホリーの事故があった翌週、僕は奥さんと、所属するNGO(るしな)の違法漁業調査チームに同行、トンレサップ湖のバードサンクチュアリに出かけた。小さなボートで、多くの確信的な違法漁業が行われる湖外縁の湿地帯を遡って行く。めったに見ることのできないジャイアント・ペリカンが、しかも群れで眼前に飛翔し、僕

らを驚かせた。

そして3月。日本を未曾有の地震、津波が襲った。母国が原発の脅威に翻弄されていたそのとき、シエムリアップでは毎年死ぬほど暑い筈のこの時期に雨がシトシト降り始めた。日照時間が短く、寒いほど。朝晩は18℃を割り、僕はフリースを着てボリスのシンクロニステイを口ずさみながら、灰色の空を見上げていた。映画「マグノリア」みたいに蛙が降ってくるんじゃないかと思っただの。

目指せ、 アンコールクラライマー誕生!!

カンボジア社会は内戦後復興を目指して高度成長期を迎えている。熾烈な生き残り、経済格差という怪物、さらに地雷、不発弾のみか、人身売買さえ現在でも現実的な脅威のひとつだし、交通事故にあっても何も保障がない。保険も医者も富裕層お抱えのオプシオンといった意味が相当強い。復興は目に見えて進んでいるけれど、繁栄から取り残される小さな社会の方が圧倒的に多いのだ。結果的に中央集権を肥大させるインフラ構築は、すべてを同時進行にはできないのだからやむを得ないとはいえ、格差をしかし、ちゃんと広げる。

大人にはなかなかスポーツなどやっている時間もないのが実状だ。クライミングが子供たちを起点に根付き始めたのは自然な成り行きだろう。しかし、そこにはセキユリテイの壁が立ちほだかった。ある親は、世界共通とも言え

る。免責規定[※]を読んで、同意を拒む。あるいは口頭では同意してもサインはしない。その文面は高圧的でさえある。さらに「オウンリスク」の解説はガンコオヤジの説教みたいだ。しかし、リスクを想像することと、その影響を他人のせいにはしないことは、とても大事なことだ。CCF(カンボジア・クライミング連盟)の代表となったシエムリアップ州教育局長のシレイデイ氏が、僕にこう言ったことがある。ポルポト政権は私たちの精神から「信頼」という有り様を奪った。それを取り戻すにはまだまだ何年も掛かる、と。そういう社会にコミットできないければ、僕らは結局誰からも受け入れられないに違いない。

このような状況のもと、僕らは当面、スムロンが親の代理人になる戦術を採った。タイトロープだと批判されそうだが、他に選択肢は思いつかなかつた。そして、「免責……」の文面から説教じみたトーンを抑え、平易に語りかける表現に修正して、粘り強く家庭面談を続けることにした。密かな決め球、奨学金制度を携えて。(続く)

※オウンリスク: Take your own risk (自己責任) の和製俗語: クライミング講習やイベントへの参加、または施設の利用に際して、事前に、自己責任であることに署名した文書、日本では「誓約書」または「念書」、英語圏では「Waiver (権利放棄書=免責規定)」の提出を、イベント開催母体や施設管理者が要求するのが通例だ。